

# 特別寄稿

## 精神看護学実習の取り組み

筑波大学医学医療系  
菅谷智一

### I. はじめに

COVID-19の感染拡大が生じるまで、精神看護学教育において、実習こそが学びの中心であると考えて教育を行ってきた。

筑波大学においては、「概論」「方法論」の座学に続き、「演習」にてコミュニケーション方法や看護過程の展開の演習を行い、それらの学習を統合する形で大学病院や精神科病院にて「精神看護学実習」を行ってきた。座学や演習が精神看護の知識の基盤を構築しているのは間違いないことである。しかし、机上においては精神科の空気感や精神障害者とのコミュニケーションの実際を伝えることは難しく、学生が実習前後で精神科へのとらえ方や関わり方が変わっていく姿を見て実習の重要性を確認していた。そのため、基礎教育における精神看護学教育は実習に向けて進めていき、実習によって完結するととらえていた。

### II. 筑波大学における精神看護学実習

本学では「対象者を理解し対象者に必要な看護を考え、精神科医療における看護の役割を理解する」ことを実習目的とし、「①対象者を生活する人として理解する」、「②看護過程を活用し、看護を考えることができる」、「③精神看護における看護の役割を理解する」の3つを実習目標にしてきた。実習目標を達成するために、精神科病棟での2週間の実習の中で1名の患者を受け持ち、看護過程を展開することで対象理解を深め、看護援助を検討していくことを求めてきた。看護過程の情報収集のためだけに患者に関わるのではなく、患者を生活する人としてとらえてもらい、患者がその人らしく生活するにはどのような援助が有用であるかを考え、それらを実践させてきた。その中で、精神科病棟の空気感を体感し、実際に患者とコ

ミュニケーションをとることで対象の理解を進めてきた。この精神科病棟の空気感を体感することや患者とのコミュニケーションは、座学や演習では伝えることが難しく、実習ならではのことであり、かつこの体験こそが今後臨床家として育っていくために重要なことであると考えていた。ほとんどの学生は将来精神科ではない領域で働くことになる。しかし、本邦ではまだ精神科病床数が多く、精神障害者として医療にかかっている者も多い。精神科病院や精神科病棟でなくても、精神障害者が身体的な疾患にかかることで、内科や外科等様々な臨床の場で精神障害者に遭遇することになる。精神看護学実習で患者と関わることで、世間や自分の中にある精神科や精神障害に対するスティグマに気づき、医療者としていかに精神障害者に関わるべきかを考える基盤を作ってきている。精神科以外に就職する学生にとっては、ここでの経験こそが精神障害者に対する看護の原点になるため、精神科病棟での空気感や患者とのコミュニケーションは欠かすことができず、病院実習のない実習など考えることができなかった。

### III. 学内代替実習の計画と実践

COVID-19の感染第3波がきた際、病院実習が中止になり、学内代替演習に切り替えざるを得なくなってしまった。

学内代替実習では精神科病棟の空気感を感じることや患者とのコミュニケーションはできなくなってしまふ。ペーパーペイシエントを用いて看護過程を展開することも考えたが、既に「精神保健看護学演習」で実施しており、改めて実習で取り組むよりも、別の内容の方がよいだろうと考え、映画の活用とコミュニケーションのロールプレイを行うことにした。

### 1) 映画の活用

精神科に興味を持ってもらい、精神看護を理解してもらいたい。この思いから、学生が興味を持ちやすく、精神科や精神看護のことを実習メンバー間で考えさせることのできる映画を使うことにした。映画は視聴者の関心を惹く内容になっており、学生が興味を持ちやすい。一方、長いものでは2時間を超える作品もあり、通常の授業では使用しにくい。しかし、学内代替実習では、朝から夕方まで時間があり、これら映画を鑑賞しその後、映画の場面ごとの補足説明をしたり、内容についての学生間でディスカッションをする時間もとることができる。また、映画では登場人物の成育や生活背景も練られており、視覚的に学生がそれらの情報をとらえることができる。

実際には何本も映画を鑑賞したがそのうち、ここでは3本を紹介する。1本目は映画「精神」である。精神科クリニックの診察風景と患者を追ったドキュメンタリーであり、実際の精神障害者の様子や言動、精神科における治療風景を見ることができる。何よりも、今まで特別と思っていた精神科で治療を受ける患者は自分たちと変わらないことを実感することができていた。2本目は「ビューティフル マインド」である。統合失調症者が主人公の映画であり、幻覚や妄想が映像で示されており、視聴している学生も幻覚や妄想の中に入り込むことができる。そのため、実際の患者が幻覚や妄想をどのようにとらえているのかを疑似体験することができる。また、生活上の困難から拒薬に至る思いや言動も描かれており、統合失調症に対する理解が進む作品であり、学生からも学びになったとの声が多く聞かれた。3本目は「ズートピア」である。ディズニー映画であり、アニメであるため学生にとっては気軽な気持ちで視聴することができていたようだ。精神科が舞台ではないものの、動物間における偏見やスティグマが描かれており、私たちの社会のスティグマを考えるにはいい題材であった。学生間のディスカッションも活発に行われていた。

### 2) コミュニケーションに関するロールプレイ

病院には行くことができないが、自分のコミュニケーションについて振り返ってもらい、少しで

も精神科病棟の雰囲気や患者とのコミュニケーションを学んでももらいたいと考え、シナリオロールプレイと模擬患者に関わるロールプレイを計画した。幸い、精神科病院に勤務経験のある大学院生がTAをしていてくれたため、彼らに協力してもらうことにした。シナリオでは悩みを持つクライアント役と相談者を演じてもらい、模擬患者とのロールプレイでは、精神科病棟で遭遇することの多い、統合失調症、うつ病、双極性障害の患者をTAに演じてもらい、看護学生としてどのように関わるのかを学生に考えさせ、実践してもらった。

シナリオロールプレイでは、短時間であるものの、自分のコミュニケーションについて観察者から指摘を受け、振り返ることで、自分の癖や特徴を知ることができていた。模擬患者に関わるロールプレイでは、これまでの座学や演習、映画による患者理解をふまえて、精神科の患者にどのように声をかけたらよいか考え、実践することができていた。精神科病棟の空気感を伝えることはできなかったものの、精神科でのコミュニケーションの疑似体験にはなっていたかと思う。

## IV. これからの精神看護学実習

コロナ禍の学内代替実習の経験を経て、改めて病院実習の重要性を再認識することになった。オンラインやオンデマンドによる授業が多くなり、いつでもどこでも学習できることが増えてきており、学生にとっては、自分主導の学習がしやすい環境になってきたのではないだろうか。しかし、実際の臨床では自分の都合で動くのではなく、対象となる患者のペースに合わせて自分が動く必要がある。病院実習では良くも悪くも自分の思い通りにならないことを経験し、患者中心の看護を考えることにつながっている。患者が主人公である舞台の中で、看護師は黒子として主人公を支える存在であるため、オンライン学習が増えてきた今こそ、病院にて実際に患者と関わる経験が必要になってきていると考える。一方で今回の経験を機に、これまでの実習指導を振り返り、実習内容の見直しや実習指導のあり方を検討することも必要であると考えている。